

へいわ なくさない

こわいをしつて、へいわがわかった

沖縄市立山内小2年 德元 穂菜

びじゅつかんへお出かけ

おじいちゃんやおばあちゃんもいっしょに

みんなでお出かけ

うれしいな

こわくてかなしい絵だった

たくさんの人人がしんでいた

小さな赤ちゃんや、おかあさん

風ぐるまやチョウチョの絵もあったけど

とてもかなしい絵だった

おかあさんが、七十七年前のおきなわの絵だと言った
ほんとうにあったことなのだ

たくさんの人たちがしんでいて

ガイコツもあった

わたしとおなじ年の子どもが

かなしそうに見ている

こわいよ

かなしいよ

かわいそうだよ

せんそうのはんたいはなに?

へいわ? へいわってなに?

きゅうにこわくなつて

おかあさんにくつついた

あつたかくてほつとした

これがへいわなのかな

おねえちゃんとけんかした

おかあさんは、二人の話を聞いてくれた

そして仲なおり

これがへいわなのかな

せんそうがこわいから へいわをつかみたい

ずっとポケットにいれてもっておく

ぜったいおとさないように

なくさないように

わすれないように

こわいをしつて、へいわがわかった



【朗読する徳元さん】

6月23日、沖縄戦から77年の「慰靈の日」。糸満市の平和祈念公園で、戦没者追悼式が開かれました。今年の「平和の詩」の朗読者は、小学校2年生の徳元穂菜（とくもとほのな）さん。徳元さんの曾祖父は沖縄戦で亡くなり、平和祈念公園の「平和の礎（いしじ）」の碑に名が刻まれています。祖父は生後間もなく失った父の、今も見つからない遺骨を探しています。家族は毎年この日に、碑の前に折り鶴や手紙を置き、手を合わせているそうです。

詩は、昨年6月宜野湾市の佐喜眞美術館で、丸木位里さん・俊さんの「沖縄戦の図」を見て、生まれました。絵の中央で正面を見つめる同年代の子が目に止まり、「悲しそうにこっちを見ている。お母さんがいない」と母親にしがみつき、そのぬくもりに「これが平和なのかな」と感じたそうです。

1974（昭和49）年、沖縄県は世界の恒久平和と全沖縄戦没者の靈を慰めることを目的に、6月23日を「慰靈の日」と制定しました。ただ、この日は沖縄戦が終結した日ではなく、南西諸島防衛のために陸軍に創設された第32軍の司令官が自決し、日本軍の組織的戦闘が終了した日であります。それ以降も沖縄は戦場であり続け、終戦を迎えた8月15日以後も多くの方々を出しています。沖縄戦は、米軍が沖縄戦終了を宣言した7月2日で一応の終焉となり、降伏調印式を行なった9月7日に公式に終結しました。

「原爆の図」で知られる丸木位里・俊夫妻は、1945（昭20）年8月6日、広島に原爆が投下された際、位里はその3日後に故郷・広島に帰り、続いて俊も広島に入り、救援活動に加わっています。「原爆の図」第1部が発表されたのはその5年後で、その後も「原爆の図」を描き続け、1982年に第15部「長崎」を完成させるまで、32年もの間「原爆の図」を描きました。その間、1975年に「南京大虐殺の図」、1977年に「アウシュビッツの図」、1980年に「水俣の図」を制作しています。「沖縄戦の図」に取り掛かったのは、「原爆の図」第15部が完成した年で、それから位里と俊の二人は沖縄戦に関する本を160冊以上読み、学者や研究者に取材し生存者たちとそれぞれの現場に足を運んで体験談を聞き、1985年、ついに縦4メートル、横8.5メートルの大作「沖縄戦の図」を描きあげました。完成した「沖縄戦の図」を見た戦争体験者の一人は、その綿密な取材に基づいた細かい描写に「こんなことまで知っているはずがない。ほんとうにヤマトントチが描いたのか。」と驚いたといいます。丸木位里は「沖縄戦の図」に関して、「原爆の図を描き、南京大虐殺を描き、アウシュヴィツツを描きましたが、沖縄を描くことがいちばん戦争を描いたことになります。」と語っています。



「沖縄戦の図」丸木位里（いり）・俊（とし）作 佐喜眞美術館常設展示

